

平成二十九年 度 聖ドミニコ 学園 中学校 入学 試験 (第三回)

国語

◎ 次の注意事項を読んでください。

- 1 試験開始のチャイムが鳴るまで開いてはいけません。
- 2 問題はぜんぶで8ページあります。
- 3 解答用紙は問題用紙にはさんであります。
- 4 解答用紙に受験番号、氏名を書いてください。
- 5 答えはすべて解答用紙に書いてください。
- 6 字数は、句読点や「」をすべて一字に数えます。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

知識も経験も話題も豊富で、頭の回転も速く、話し方も注1流暢なのに、まったく話が面白くない人がいます。

先日もそんな人と会食する①キカイがあつたのですが、お会いしてからというものずっと一方的に自慢話を聞かされ続けて、注2辟易してしまいました。

ただ、仕事もできて、お金もあるという社会的な身分の高い人でしたので、プライドも②ヒジョウに高いゆえ、話を途中でさえぎるわけにもいきません。同席していた女性と、思わず「参ったね」と目で③アイズしてしまうほどでした。

世間的にはA「勝ち組」に属している人なのに、逆にもつたいないなあと思ったものです。これでこの人が面白い話ができるようになるれば、鬼に④金棒、美人に愛嬌です。「B aの振り見て b振り直せ」に従うと、自分も注意せねばと思いました。

ここにも「話術の落とし穴」があります。「話の面白さは、豊富な話題や話のテクニクだけではない」ということが言えるのです。自慢というのは極端ですが、そのわかりやすい例ですね。

真面目なオトナほど「話の上手い下手を差別化させているのはテクニクⅡ話術だ」という思い込みがあるようです。私もつねに気をつけていることですが、本来は「いかに面白い話をするか」にポイントを置くべきです。

1、いつの間にか、その手段であるテクニクを上昇させることがメインになってしまっていたというC転倒現象、落語の世界でいう「稽古に溺れてしまう」⑤ジタイが起きます。あくま

で稽古は手段にすぎないのに、「稽古だけやっていたれば大丈夫」となってしまうのです。

また、大人になればなるほど、殊に頭のいい人たちは、負けを恥とするあまり、勝つことに⑥イヨウにこだわるようになって、それは会話にまで表れるようになります。すぐに「結論」をはじき出そうとしがちになるのです。

私も前述の場面で、なんとかその人の話を、ほかの人も参加できるように別な話に切り替えようと試みたのですが（これはかなりのテクニクがいります）、彼はそれも先回りして結論を言っていました。これはかなり辛いものがあります。

わかりやすくいえば、ブラダのバッグを持っている人に向かって「ゼニールですよね」とか、美味しいデザートを食べている人に「デブの素です」と言い切ってしまう行為に匹敵します。

D頭の回転が速すぎるデメリットなのでしょうか、会話は「知識のひけらかしの場所」でも、ましてや注3ダイベートのような「勝負する場所」でもありません。

会話は結論を求めるためにあるものではないのです。相手とのコミュニケーションを促進させるためにあるもので、結論が出なくても問題ないことは多々あります。会話とは、注4プロセスそのものを楽しみながら、お互い気持ちよくなるためのものです。

「饅頭怖い」という落語をご存じでしょうか？ 話の⑦ヨウヤクは次の通りです。

「お前、何が怖い？」と順に登場人物に聞いてゆきます。それぞれが「ミミズ」だの「蜘蛛」だの、「怖いものとその理由」をあげてゆくのですが、その中の一人が「饅頭が怖い」と言い出し、あ

まりの怖さに布団をかぶって寝込んでしまいました。

2、仲間内の一人が「あいつに本物の饅頭を買ってきて驚かそう」と言い、同意した者たちが、それぞれ饅頭を買ってきて彼の枕元に置いて気づかせます。すると気づいた当人は、饅頭を怖がりつつも食べてしまいます。こいつはもともと饅頭を食べたかっただけです。謀られたと悟った男たちが「お前、本当に怖いものは何だ？」と問うと、その男は「熱いお茶一杯が怖い」とオチを語るのです。

E 他愛もないネタバレした前座噺ではありますが、「お前、何が怖い」という最初の問いかけで、いきなり「うん、俺は[]が怖い」と言ったら、どうなるでしょう。もうそれで、この落語はおしまいです。(最近、私はあえて最初にこれを言ってしまう噺をサイヨウウしています)。

テニスにたとえると、会話で大事なものは「注5スマッシュ」ではなく「注6ラリー」なのだと思われざる好例です。むしろ、一番大事なのは、相手(具体的にいうとオトしたい相手)に「スマッシュ」を打たせることなのです。

「受け止め力」に置き換えると、まずは相手を受け入れるという、これはさしずめ「ホウヨウリョク」、会話という試合展開を有利に運ぶための「コウセイリョク」といったところでしょうか。

ここでは極端な例をあげましたが、とりわけ自慢話は嫌われまです。煙たがられるのは自慢話だけではありません。愚痴や悪口なども該当します。人は快調に飛ばしているときほど、自慢話を頻繁に繰り出すものです。「独演会名人」と化してしまったフツの人のフェイスブックやらツイッターやらでは、よくそんなケースを目にし

ます。

3 愚痴や悪口はともかく、Fなぜ自慢話は毛嫌いされるのでしょうか。自慢話とは「成功事例」です。聞かされている人にしてみれば、あくまでも自己完結した閉ざされた世界の寓話なのです。

要するに、相手側が介在する「スキ」がないのです。この「スキ」がないからこそ、息苦しさも感じてしまうのです。

「お互い自慢を言い合う」というような、相手にもその権利を与えるのであれば、そこにコミュニケーションも生まれ、お互いに楽しくなる可能性は見出せます。ですが基本、自慢は聞く側への敬意が欠如してしまうものです。ここにも、話題の豊富な人が陥りやすい穴があります。

(立川談慶『いつも同じお題なのになぜ落語家の話は面白いのか』)

注1 「流暢」：言葉がすらすら出てくるさま。

注2 「辟易」：困りきる事。

注3 「ダイベート」：討論。

注4 「プロセス」：過程・経過。

注5 「スマッシュ」：強い球を打ちこむこと。

注6 「ラリー」：打ち合いを続けること。

問一 線①「キカイ」、②「ヒジョウ」、③「アイズ」、④「金棒」、⑤「ジタイ」、⑥「イヨウ」、⑦「ヨウヤク」、⑧「サイヨウ」、⑨「ホウヨウリョク」、⑩「コウセイリョク」の、カタカナは漢字に直し、漢字は読み方をひらがなで答えなさい。

問二 — 線A 「勝ち組」に属している人」とはどういう人のことですか。本文中から25字で探して、最初と最後の6字をそれぞれぬき出しなさい。

問三 — 線B 「a」の振り見て「b」振り直せ」の、「a」、「b」に入る言葉を、それぞれひらがな2字で答えなさい。

問四 1、2 に入る最も適当な言葉を、次から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア たとえば イ しかも ウ そこで
エ ところで オ しかし

問五 — 線C 「転倒」の□に入る言葉を、漢字2字で答えなさい。

問六 — 線D 「頭の回転が速すぎるデメリット」とは、具体的にどういうデメリット(短所)ですか。「こと」に続くように、本文中から21字でぬき出しなさい。

問七 — 線E 「他愛もない」の意味として最も適当なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア しかたがない イ とりとめもない
ウ あきれてしまう エ 他の人に聞かせたい

問八 □に入る最も適当な言葉を、本文中からぬき出しなさい。

問九 — 線F 「なぜ自慢話は毛嫌いされるのでしょうか」とありますが、その理由を、「から」に続くように、本文中から15字でぬき出しなさい。

問十 次の一文を入れる所として最も適当なのは 1、2、3、4、5 の中のどこですか。1〜5の数字で一つ答えなさい。

サッカーというならば、相手がゴールを決めやすい「キラーパス」を送り出すことととってもいいと思います。

二 小学二年生の「ぼく」は、幼なじみの女の子・ふみちゃんのピアノの発表会に招待された。会場で会ったふみちゃんは、本番を楽しみにしているようだったが、自分の直前に発表する子が休みになったと聞かされると様子がおかしくなり、席を離れて、自分の出番が近づいても帰ってこない。ふみちゃんを探しに行った「ぼく」は、会場の二階の隅でうずくまる彼女を発見する。その場面の続きである次の文章を読んで、後の問いに答えなさい(設問の都合上、本文を一部改めた)。

「あの子の後に……、ピアノ弾くの、やだ」

ピアノの演奏が、また終わった。ぼくの覚えているので正しければ、次の子はふみちゃんの二人前の演奏者。次の次が、ふみちゃん。

そして一人休んだせいで、ふみちゃんの前に弾くのが、あの子。

ふみちゃんほくに話してしまったことを後悔するようになつた。顔が耳まで真っ赤になる。恥ずかしくてたまらないのだ、^①不思議に思ってしまう。何がだろう？ 何がそんな恥ずかしいんだらう。

「ふみちゃん」

「もうやだ。もう、やだ」

さつきふみちゃんの先生が言っていたふみちゃんの前の演奏者は、ぼくも知っている子だ。隣のクラスの男子で、直接話したことはないけど、とてもおとなしい子。ピアノを習ってるらしいってことも、知ってた。

男の子が習い事にピアノを選ぶのは珍しい。それって確かにかっこいいけど、ふみちゃんが何を恥ずかしているのか、^Aどうして彼の後の演奏が嫌なのかは、ぼくには理解不能だった。

「すぐく、うまいの」

泣き出しそうな声が、ぼくに教えてくれる。

「あの子、すぐくすぐく、うまいの。ふみ、知ってる。あんなの、誰も勝てないよ」

「ふみちゃんより順番が早いってことは、ふみちゃんより簡単なやつを弾くってことでしょ？」

「そうだよ。だけど、駄目。あの子は、簡単な曲でもうまいんだよ。ふみが、みんなにつきはぎだらけのボロボロだって、ばれちゃうよ。どんな難しい曲を弾いても、みんなにわかっちゃうよ」

つきはぎだらけのボロボロ。

ふみちゃんが使った言葉に、ぼくは^②射すくめられたようにその場を動けなくなつた。言うなり、ふみちゃんはまた顔を覆ってしまう。本当にこの場から動くつもりがないのだとわかつた。どうやら本気だ。

「そんなの……」

そんなのおかしい。ふみちゃんはボロボロなんかじゃない。思うけど、その時のぼくは完全にふみちゃんの^{注1}剣幕に圧倒されてい^Bた。何より、いつも^{注2}毅然として自信家なふみちゃんが、自分のことをそんな風に思っていることに驚いていた。

お母さんやおばさん呼びに行っている時間がなかった。その子のピアノは、ふみちゃんが言う通りきつと上手なんだろう。けれどしつくりこなかった。ふみちゃんだって、頑張って練習してきたはずなのに。

ぼくは床に膝をつけ、ふみちゃんに¹と近づいた。

「ふみちゃんは、ピアノが上手だよ」

「だけど、ばれるよ」

返ってくる彼女の声は、弱々しくて小さかった。今にも崩れそうだった。ぼくの方に、もう顔を上げてくれなかった。

「難しい曲弾いても、あの子には勝てない」

聞こえてくるピアノのこの曲も、もうすぐきつと終わる。早くしないと、ふみちゃんの順番が飛ばされる。

「勝ちたいの？」

ぼくが尋ねたその時だった。足下のピアノ曲が、音を長く響かせて途切れた。ふみちゃんの腕が、²と震える。ぼくの声に対してそうなのか、それとも演奏が終わったそのせいなのか。どちらかはわからなかった。演奏者に向け、ザザザ、と波の音のよう

な拍手が起こるのが聞こえる。

ふみちゃんが微かに顔を上げた。ぼくを見ないで、目だけ覗かせる。泣いているわけではなさそうだったけど、充血して赤くなっていた目だった。

「勝てないことがわかってるの」

3と言ったふみちゃんの声は、ひどく掠れていた。負けず嫌いで、向かうところ敵なしの彼女の口からそんな弱気な発言が飛び出すなんて。

「だけど、難しい曲にすれば、勝てないけど、ふみも恥ずかしくないとと思った。あの子のすぐ後はチエちゃんが弾くし、そのチエちゃんの後だったら、みんな、お母さんもクラスのみんなも、あの子がすぐくまかったことをちよつとは忘れてくれるんじゃないかと思つて。だけど……」

自分の膝を抱えるふみちゃんの手に4と強い力が込められた。そして言う。

「恥ずかしいよ。どうしよう、恥ずかしいよ」

その時だった。ザザザザ、さつきと同じような控えめな拍手。その気配が足の下から伝わってきた。ふみちゃんの一つ前の、あの子の順番。彼がライトを浴びて、礼をするところが5ソウゾウできた。

「ふみちゃんだつてうまいよ。だからもう……」
行かないと駄目だ。

そう言つて、腕を引こうとした瞬間——、ぼくは伸ばしかけた手を止め、声を失った。ポロン、下からピアノの音が聞こえたからだ。けれど、違う。さつきまで聞こえていた音色とはまるで違う。

ピン、と糸が張りつめたような、通りのよい音。

D ぼくは思わず床に顔を向けた。そこから透けて見えるわけもな

いのに、そうせずにはいられなかった。

柔らかくて、優しい曲だった。確かに使われている音はそう多くないのだろう。ふみちゃんの『エリーゼのために』の方がきつと長し、指使いも難しいんだらうってことはソウゾウできる。けれど、何なんだろう、これは。

力いっぱい弾いている雰囲気はまるでないのに、ものすごくよく聞こえる。さつきの子のピアノの方が、もつとずっと強い調子だったのに、今聞こえるこの演奏は、穏やかなのに段違いに張りのある音色を思ひ出す。あのピアノの黒い輝きと、この音が似て思えた。

ぼくには、ピアノのことなんて何もわからない。『猫ふんじやつた』は『猫ふんじやつた』だ。だけど、はつきりわかった。ふみちゃんの言う通り、これを弾いている子は多分、すごくピアノがうまい。

「バイエル」

ふみちゃんの声がして、ぼくははつと顔を上げる。悔しいような、泣き出しそうな顔のまま、ふみちゃんはまだ同じ姿勢でそこに座ったままだった。

「一番最初に勉強する、簡単なピアノの本なの。あの子が弾いてるのは、その中の一つ」

何回か見かけたことのある隣のクラスのあの男の子は、背が小さくてどっかぼんやりした目をしてる子だった。あの子が、これ弾いてるなんて嘘みたいだ。

「わかんない子もいるかもしれない、あの子もふみも同じぐらいだ

って思ってくれる人もいるかもしれない。だけど、知ってる。ふみはポロポロで、この子はピカピカの天才だよ」

何でもよくできるふみちゃんだけど、確かにピアノは勉強や習字に比べて彼女の⑤ センモンではないのだろう。けれど、ふみちゃんは、自分自身が天才じゃなくても、天才が誰か、それがどういいうのかを理解できる秀才^{しょうさい}ではあるのだ。

ぼくの中の認識が間違っていたことに気づく。ぼくは、ふみちゃんは大人にほめられれば、それでいいんだと思ってた。クラスメートたちに何を言われても平気でいるのも、そのせいだと思ってた。

E E だけど、多分、違うんだ。

ふみちゃんがクラスの他の子たちを許してるように見えること。それは多分、ふみちゃんがいる場所がそんなところにならないからだ。クラスメートたちよりも、彼女をほめてくれる先生や大人たちよりももっとずっと大きな、目に見えないものがふみちゃんが立ち向かう相手。

だから、今日までずっと練習してきたその⑥ ドリヨクを手の中で握りつぶそうとしている。

聞こえるピアノは、同じメロディーを違う風に何度も何度も繰り返す曲だった。知らない曲のはずなのに、それでも耳が音を追いかけしてしまう。

どうしようもなく、ぼくはやるせない気持ちになった。うまく言えないけど、この時のぼくは、ふみちゃんが本当に正しいと思っただ。教科書に出てくるように正しい。ここまででいいやっていうあきらめのない、ただただまっすぐな姿勢。ふみちゃんはそれが曲げられないだけ。どうしようもないから、負けを認めて逃げようとしている。

「だけど、ぼくは嫌だった。わがままだけど、ふみちゃんに逃げて欲しくなかった。」

「だけど、行かなきゃ駄目だ。今ならまだ間に合うよ」

教科書を見て発言したり、宿題を⑦ ウツしたりするズルを注^{けいべつ}軽蔑するふみちゃん。天才が誰か^{だれ}ってことをわかっちゃうふみちゃん。

友達ができない、頭のいい、正しいふみちゃん。一人だつて平気なふみちゃんをぼくは⑧ ソングイしていて、今日のこれは、そんなぼくが初めてみる F 舞台裏のふみちゃんだった。正しいことをしよう、いつも一生懸命なんだ。

「ぼく、聞きたいよ。ふみちゃんのピアノが好きだし、ぼくは」

今はいいかもしれない。逃げて、胸がほっとするかもしれない。だけどふみちゃんは、今日ここで逃げたことを多分ずっと引きずって、何度も何度も思い出して苦しむだろう。他の子や、それにぼくだったなら、ごまかしながら忘れてしまおうだろうけど、ふみちゃんは違う。きつとずっと覚えている。

「ぼくは、ふみちゃんに、いつも堂々として欲しいんだ。そんな友達、ぼくにはふみちゃんしかないよ。ぼくはふみちゃんと仲がいいことが自慢なんだ」

友達だけど、ちよつと憧れだから。

それを聞いたふみちゃんの目に、不思議な光が浮かんだ。それまでずっと宙だけを睨んでいた目がゆっくりとぼくの顔を見る。

どうしてぼくが泣きそうになってるんだろう。頭の奥がぐらぐらする。ほつぺたが熱い。

「ねえ、ふみちゃん」

喉の奥が熱く震え出す。普段女の子と手をつなぐなんて、絶対に

しちゃいけない恥ずかしいことだと思つてたのに、とても自然にぼくの手がふみちちゃんの膝の上の手に触れた。ぼくの熱い手と反対に、冷たい手だった。これからピアノ弾くの、これじゃ大変だ。

G 自分自身が空気を吸い込む音を聞いたと思つた。ぼくは彼女の目を見つめ、そして呟いた。

「戻つて、みんなの前できちんとピアノを弾こう。そうじゃないと、この先一生、いつまでも思い出して嫌な思いをするよ」

それを告げた、その時だった。

⑨ ぼくの肩からふつと力が抜ける。どうやら緊張していたらしい。膝がかくんと力をなくして、ぼくは床にぺたりとお尻をつけて座り込んだ。

ぼくの言葉を受けたふみちちゃんは、とても静かだった。ただ黙つて、ぼくを見つめ返している。ふいに大きく瞳が揺れて、泣き出しそうな顔をしてぼくから⑩ シセンをそらす。そして尋ねた。

「本当？」

「え？」

⑪ 掠れた声だった。目を合わせないまま、ふみちちゃんの小さな声かもう一度する。

「ふみと仲がいいことが自慢だった」

「そうだよ」

答えると、ふみちちゃんは唇を引き結んだ。ピアノが、さつきまどとメロディーを変えている。もう、いつ終わってもおかしくないように思えた。

ふみちちゃんが、すつくと立ち上がった。座り込んでいるぼくを見下ろし、そして頷いた。

「ありがとう」

言うなり、すごい速さで走り出した。逃げるためにそうしたわけではないことが、ぼくにはわかった。ドレスのスカートがレースと一緒に揺れる、その後ろ姿を確認して、ぼくは、わあっと声を上げた。たい気持ちになった。

(辻村深月『ぼくのメジャー Spoon』)

注1 「剣幕」…(怒ったときの)迫力のある顔つき、ようす。

注2 「毅然」…意思が固く、物事に屈しないようす。

注3 「軽蔑」…軽く見て、見下すこと。

問一 線①「不思議」、②「射(すくめ)」、③「ソウソウ」、

④「失(つた)」、⑤「センモン」、⑥「ドリヨク」、⑦「ウツ(し)」、⑧「ソンケイ」、⑨「告(げた)」、⑩「シセン」の、カタカナは漢字に直し、漢字は読み方をひらがなで答えなさい。

問二

線A「どうして彼の後の演奏が嫌なのか」とありますが、ふみちちゃんが嫌がった理由として最も適当なものを次から一選び、記号で答えなさい。

- ア 彼は、男の子なのにピアノを上手に弾けてかっこいいから。
イ 彼は、ふみちちゃんよりも難しい曲でさえも簡単に弾くから。
ウ 彼は、ふみちちゃんと同じ曲をより上手に弾いてしまうから。
エ 彼は、自分より簡単な曲を弾いても分かるほど上手だから。

問三 — 線B「ふみちゃんが、自分のことをそんな風に思っている」とありますが、どのように思っているのですか。「と思っている」に続くように、本文中から12字でぬき出しなさい。

問四 1 4 に入る最も適当な言葉を、次から一つずつ選び、記号で答えなさい（同じ記号をくり返し使うことはできません）。

ア ギゅつ イ びくん ウ ぼつり エ そろそろ

問五 — 線C「向かうところ敵なし」の意味として最も適当なものの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア どんな人が相手であっても負けないこと。
イ だれが相手でも味方につけてしまうこと。
ウ 自然と敵対する人のいない方へ進むこと。
エ たとえ敵に負けても気にせずにいること。

問六 — 線D「ぼくは思わず床に顔を向けた。そこから透けて見えるわけもないのに、そうせずにはいられなかった」とありますが、この動きは「ぼく」のどんな心情を表していますか。最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ふみちゃんに言いたいことを言えない弱気な気持ち。
イ ピアノの音色の美しさに驚いて心を奪われる気持ち。

ウ 突然のピアノの音色に怯え、正体を知りたい気持ち。
エ ふみちゃんと彼との上手さの差を見極めたい気持ち。

問七 — 線E「だけど、多分、違うんだ」とありますが、「ぼく」が気づいたふみちゃんの目標はどのようなものですか。本文中から15字以内でぬき出しなさい。

問八 — 線F「舞台裏のふみちゃん」とはどんなふみちゃんですか。10字以内で考えて答えなさい。

問九 — 線G「自分自身が空気を吸い込む音を聞いたと思った」とありますが、この時の「ぼく」の気持ちを40字以内で説明しなさい。

問十 次の説明の中から、本文の内容に合っているものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア ふみちゃんの前の演奏者が急に休みになったため、ふみちゃん準備のための時間が少なくなったことにあせっている。
イ ふみちゃんは隣のクラスの男の子にピアノで勝てないと考えているが、「ぼく」はふみちゃんの方が上だと考えている。
ウ 「ぼく」は、ふみちゃんが発表会から逃げることで、彼女がこの先ずっと後悔してしまうのではないかと心配している。
エ ふみちゃんがそろそろ舞台に戻ろうかと思っていたところに、「ぼく」が言葉をかけたので、ふみちゃんも納得した。